

文化庁月報



1987-5

No. 224

【表紙】

蒔絵螺鈿有職文飾箱

松田権六

昭和35年制作

・解説は30ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

もくじ

巻頭随想

「文化」雑感

遠山 一行 4

特集：文化会館

明日の文化会館を考える

佐藤 武 6

—自主事業活性化の模索—

役者にとっての文化会館・劇場

浜畑 賢吉 8

文化会館入門

牛島 忠夫 11

—都道府県のページ—

我が県の文化行政②

「長崎学」の振興について

長崎県 14

・都道府県月間行事予定 5月

16

—文化行政質問箱②—

著作権 2

17

—文化庁だより—

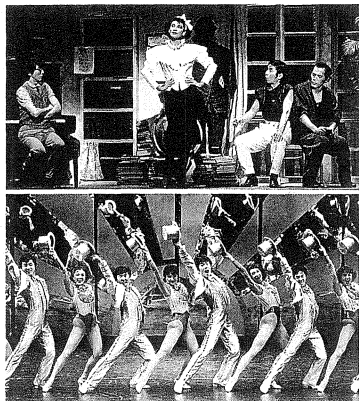
報告／美術館等運営研究協議会について 18

文化庁ニュース

- ・第2回国民文化祭実施計画決まる 21
- ・日本芸術院賞受賞者決まる 22
- ・史跡の指定等—文化財保護審議会の答申— 23
- ・重要無形文化財の指定等 24
- ・重要文化財（建造物）の新指定 26
- 文化財保護審議会の答申—
- ・重要伝統的建造物群保存地区の新選定 27
- 文化財保護審議会の答申—
- ・重要文化財（美術工芸品）の指定 28
- 文化財保護審議会の答申—
- ・昭和61年度文化庁優秀映画及び子ども向けテレビ 29
- 用優秀映画製作奨励金交付作品決まる

・文化庁行事報告及び予定……………30

・国立劇場ニュース……………31



日曜はダメよ／(上), コーラスライン(下)

か、我々役者には生命線となる言葉が、客席で聞きとりにくい小屋。
しかし、これらは役者の訓練と演出スタッフのちよつとした気くらりで(例えば舞台装置によつても違うから)、かなり補っている。
文化会館や劇場との長いつきあいの中で印象深いのはやはり「柿(こけら)おとし」である。ヨーロッパでは柿おとしの舞台を観ると十年長生きするともいわれているし、役者として柿おとしの舞台に立てるといふのも、一生の間にそうあることではない。
出来立ての新しいホールは、美しい板が木の香りを漂わせ、少女のように恥じらいながら我々を迎えてくれる。
こちらも手慣れた小屋のように気楽なつきあい方ではない。ジロドウが「オンデイヤー」でいうように「劇場に無理強い禁物」

日本全国の小屋を廻っていると面白い体験もある。
「間奏曲」(ジロドウ作)で山の中の町。開演中に豪雨と雷。体育館に近い造りであったから外の音が全部聞こえる。そのうち喋っている鼻先にポチッ、ポチッ、と雨漏り。気にしないで芝居を続けなくてはと、気を

誰のためのホールなのか

舞台稽古の初日。我々はおずおずと声を出してみる。相手もそつと声を投げ返してくれる。お互いに探りあっているのか、なかなかしつくりとつかない。
二日程こんな状態が続くが、三日目くらいになると急に小屋が鳴り出してくる。
「きたぞ! きたきた!!」
役者もスタッフも内心そう感じる。
「小屋の壁が声を吸い込んで、やつと響いてくれるようになった」
役者は、よくこんな表現をするのだが、これが科学的にどういうことなのかはまったく判らない。
舞台で喋っているも、客席で聞いているも確かにそう感じるのだが、口のきけない生まれたての小屋も、こちらが祈りをこめて付き合っていくと三日目には、実にのびのびと返事をしてくれるようになる。
だから文化会館・劇場は生きもののなのだ。

ところが、なぜかその日に限って蝙蝠が入り込んでしまった。我々にはどうしようもない。おとなしく共演するしかなかったのだが、出演者も客席もほとんど影響を受けずにいられたのは、あの蝙蝠、かなりの名優だったに違いない。
真夏の北海道も怖い。ほんとに暑い日は一週間しかないのだから、そのための冷房施設をもった小屋は少ない。
ところが、その魔の一週間にあたってしまった公演がある。当然のことながら町の人は短い夏を楽しみに海へ行ったりしていてお客様の入るも悪い。
舞台も客席もいい知れぬ猛暑。この町ではこの時期だけが、外気は三十四度もある。主催者は、申しわけないと、楽屋に水柱を運んだりしてくれたのだが、まさに「焼け石に

役者にとっての文化会館・劇場



吉 賢 畑 浜

ホールは生きもの

劇作家としては、今世紀最高峰ともいうべきフランスのJ・ジロドウは、名作「オンデイヤー」の中で劇場について、支配人にこう語らせている。
「かつて私の管理しておりましたある劇場では、古典ものではしつくりこない。軽騎士のファルスならいつでも大当たり、つまりこれは雌の劇場なのであります。またある劇場では、少年聖歌隊でないとイメージが合わない。これは、つまり、同性愛の劇場だったのであります。さらに昨年、私が公園劇場を閉鎖せざるを得なくなったのは、あの劇場が近親相姦の戯曲しか受けつけなかったからであります」(米村 晰 訳)

このように劇場には特徴的な性格はいうまでもなく、性別まであるというのである。
日本全国の劇場、市民会館、文化会館などで公演活動を行っている我々も、表現の仕方は違いますがこれと同じような話をする。
「この小屋(今でもこんないい方をする)はソプラノ小屋だね。男はちよつと硬目に喋らないと言葉が通らないぞ」
「こはわんわん響くから、大きな声よりムラなく喋った方がいいね」
全国公演は、今のところほとんどが、乗り打ち(移動したその日に公演すること)であ

るから、毎日、ホールの条件は変化する。
だから、一日の公演スケジュールには「声あたり」という時間が必ず入っている。お互いに舞台で科白を喋って、客席のいろいろな位置から聞き合うのだ。
それで、件の話が出てくるのである。しかも、ホールは生きものであるから常に同じ条件で我々を迎えてはくれない。
その時の舞台装置にも、客席の埋まり方にも、温度や湿度によつても大きな影響を受けている。

「あれ!? 去年きた時と声の響きが違うな」かなり頻繁にこんなことがある。それは古い文化会館が、ちよつと壁の手直しをしていたり、訪れる時期が夏冬逆だったり、客席のビニールカバーが外されているといったまったく単純な原因なのである。
声だけの条件を考えても、日本全国、北から南まで、それぞれの文化会館によつて、まことにさまざまである。

風呂場で歌うように響く小屋は、オーケストラには良くても我々には苦勞が多いし、逆に演劇に合う小屋での音楽は多分ものたりないだろう。
声はホール中を駆け巡り、客席にいと二重、三重のエコーで聞こえてくる小屋。
舞台への返り(反響してくる自分の声)はいいのに、実は舞台内で廻っているだけで、客席には声あまり出ていない小屋。
声は聞こえるのだが、音の分離が悪いせい

取り直した途端にブツン。停電である。

同じ体育館でも真冬はまた違う。広島県の山中。ここには当然楽屋はない。裏にある老人ホームに石油ストーブを入れてもらったのはいいのだが、その日は大雪。
「ヴェニス」の商人の裸に近い衣裳で、老人ホームから体育館まで雪の中を走るのだ。

舞台袖にスタンバイする役者が皆アハアと白い息を弾ませていたことが忘れられない。「アプローズ」で宇部の渡辺翁記念館にも行った。袖はちよつと狭いが(昭和十二年に造られた)、建築家村野藤吾先生らしい格式がある。
ところが、なぜかその日に限って蝙蝠が入り込んでしまった。我々にはどうしようもない。おとなしく共演するしかなかったのだが、出演者も客席もほとんど影響を受けずにいられたのは、あの蝙蝠、かなりの名優だったに違いない。

真夏の北海道も怖い。ほんとに暑い日は一週間しかないのだから、そのための冷房施設をもった小屋は少ない。
ところが、その魔の一週間にあたってしまった公演がある。当然のことながら町の人は短い夏を楽しみに海へ行ったりしていてお客様の入るも悪い。
舞台も客席もいい知れぬ猛暑。この町ではこの時期だけが、外気は三十四度もある。主催者は、申しわけないと、楽屋に水柱を運んだりしてくれたのだが、まさに「焼け石に

水”。裸のまま水柱に抱きつきたいくらいだったから、まして楽屋は何度あったことだろう。鹿児島のある町、ここには小さな楽屋しかない。「日曜はダメよ！」で男優のほとんどは港の労働者の扮装をしていた。

開演前、控えている部屋がないので女優以外は皆表に出て涼んでいる。そこは文化会館の入口への通り道で、お客様がゾロゾロと歩いていく。

ところが、薄暗くなっていたこともあってか、誰も出演者に気がつかない。扮装からして、多分本物の労働者に見えたのだろう。

こんな体験は楽しい思い出である。

歴史的にみて、完璧な劇場ばかりがあるわけでもないし、この十年間に造られた文化会館や劇場がかなり良くなってきているだけでも良しとすべきであろう。ホールの条件は、頭を使えばかなりの部分が克服できるものである。

しかし、舞台の世界で絶対に許されないのは、このような細かい条件ではなく、いわゆる手抜きである。

役者や裏方の手抜き、文化会館や劇場を造る人間の手抜き、ホール関係者の手抜き。その数例を挙げてみよう。

客席と舞台の高さが計算されていないで、最前列の人は役者の胸から下はほとんど見えないホール。これは選挙演説会場を目的に造られた政治的所産かも知れない。

客席の最前列、つまり舞台に立っている我々の目の前に出入口があるホール。遅れて入ってきた人がドアをあけると、公演中の役者とコンニチワである。

戦艦大和の煙突を模したといわれている文化会館。確かに表から観ると奇抜である。しかし、それは文化施設としての機能と関係があるのだろうか。楽屋から客席までが円形の枠に収められるから、舞台袖にある大道具を昇降させる引綱もこれに影響されてまことに使いにくい。

それより何より、客席のためにも造られていないから小屋としては最悪。こんな形にする必要が誰のためにあったのだろう。

客席にまったく必要のない飾りをしたり、客席が左右対象でなく変形しているホールがあったりするのも困るが、これと同様に困るのが空調である。

舞台に立っている間中、冷たい強風が吹き抜け、全員冷え切ってしまったこともある。

客席の最後列に座って演技をする「コーラスライン」で初めて気がついたのだが、空調というのは、他の建築技術の進歩から取り残されてしまったように思える。

全体の冷過ぎ暑過ぎの無神経さはホールだけでなく、新幹線などでも体験しているが、五年程前に出来た或るホールには、コーラスラインで私が座る客席の真上に大きな穴がある。当然、同じ状況がその小屋にいくつあるわけで、そこから凄いい冷氣がブオーツと吹

き出てきて頭から吹きかかる。激しく踊った後の汗でさえ五分で冷えてしまった。

私は舞台稽古の時に気付いて、ガムテープなどでその穴を塞いでもったが、他の客席に座った人は間違いなく風邪をひいたことと思う。

このような機構上の欠陥の他にも問題はまだまだある。それは各地の文化会館担当者だ。文化に力を入れる市や町では、それなりの担当者を選んでくれるから、公演がまことにスムーズにいく。

その逆が困る。窓際から直行させられたような担当者。文化のため、住民のためなどということは、まったく考えていないから、まして舞台成果など考えるわけがない。ひたすら保身のみ。ミスを少なくするために規則を厳しくするに限ると考え、「夜は十時までに退出すべし」とくる。

公演は、六時半の開演で九時半に終わる。役者は化粧をおとして飛び出せば間に合わないこともないが、大道具をばらしてトラックに積み込むスタッフはどうなるのか。何度交渉しても駄目。とうとう十時に電気を切られてしまったひどい例すらある。

日本各地に、立派な文化会館が次々に造られている現在、文化施設というものが一体誰のために存在するのか、原点にたつてもう一度考え直してみたいものである。

(劇団四季 俳優)

編集後記

○今月は文化会館をテーマにお送りしました。佐藤氏には今後の文化会館のあり方についての示唆をいただき、浜畑氏には俳優として実際に会館を利用する立場から生きものとしてのホルの姿を描いていただきました。また、牛島氏には文化会館一般についてわかりやすく説明いただきました。

○文化庁でも、先月ご紹介したとおり「公立文化施設技術職員研修会」を実施していますが、今後とも充実させていきたいと思っています。

(S)

おわびと訂正

先月号7頁「地域文化と行政」の中で以下の誤りがありましたので、おわびとともに訂正させていただきます。

一段目20行目 鶴劇団ブーク 田劇団ブーク
一段目22行目、24行目 鶴ウニア 田ウニマ

広告の問合せ・申込み先

株式会社 きょうせい 営業課
TEL(03)2681-2141(代表)

「文化庁月報」五月号

(通巻第二四号)
昭和62年5月25日印刷・発行
編集 文化庁

発行所 株式会社 きょうせい
〒100東京都千代田区霞が関3丁目2番2号
本社 千代田区中央区銀座7丁目4番12号
営業所 千代田区新富町西五軒52番地
電話 (03)2681-2141(代表)
振替口座 東京 91161番
印刷所 ㈱行政学会印刷所

定価 180円(送料45円)
年間購読料 2,160円(送料共)